

急募!
獣医師
畜産県・熊本で

家畜を診療する産業動物医
と、県庁所属獣医師の仕事は
かなり異なる。県健康危機管
理課には食肉の安全性を点検
する公衆衛生獣医師がおり、
県畜産課には家畜伝染病の防
疫などを手がける農林水産獣
医師がいるが、いずれもなり
手不足が続く。

●肉の安全性検査

ガチャンガチャン、プシユ
ー。機械音とともに、皮をは
がれた牛の胴体が運ばれてく
る。ここは県内の牛の約60
%、豚の約75%を処理する菊
池市の「熊本畜産流通センタ
ー」だ。
隣接する県食肉衛生検査所
から、公衆衛生獣医師28人

県職員獣医師

食の監視役 欠員常態化

- 県庁所属獣医師の主な仕事
- ▽県畜産課（県庁、家畜保健衛生所）
 - ・家畜伝染性疾病（牛海綿状脳症＝BSE、高病原性鳥インフルエンザなど）の防疫
 - ・飼養管理や経営指導など畜産農家の指導
 - ・家畜疾病に関する試験・研究
 - ・医薬品の安全性確保のための動物用医薬品の検定
 - ・畜産物の安全性確保のための薬事監視
 - ・魚病対応
 - ▽県健康危機管理課（県庁、保健所、食肉衛生検査所、試験研究機関）
 - ・食肉の安全性確保のための食肉処理場での検査、食品衛生監視と指導
 - ・旅館、公衆浴場など生活環境保全のための環境衛生監視と指導（大腸菌検査など）
 - ・狂犬病予防
 - ・水道施設への立ち入り検査
 - ・公害防止のための工場・事業場の立ち入り検査

（正職員18人、非常勤職員10人）のうち正職員16人が3人ずつ交代でセンターに入り、1日120～130頭分の牛肉を検査する。内臓を見てリンパ節の腫れや腸の炎症を探す。胴体を半分についた枝肉を「鉤」というかぎ状の器具で回転させ、温水で洗う。牛海綿状脳症（BSE）特定危険部位の脊髄が除去できているか見る。胴体から切り離れた頭部から延髄を抜き取り、BSE検査に回す。豚も1日約600～700頭を獣医師5人で検査する。

OBや囑託で補充

鶏を検査する食鳥検査や理化学検査なども輪番で担当する。獣医師の松本博・同検査所次長(55)は「厳しい仕事だが、病理学や解剖学など大学で学んだことを活用でき、自分の手で食の安全を守っている自負がある」と語る。

前回の調査結果は「シロ」。牧場主の松高春男さん(40)は「ほっとした様子だった。牛は体調を崩すと毛づやが悪化し、肉にサシ(脂肪)が入らず黒っぽくなる。「病気で肉質が落ちると、何十万円という収入の差になりかねない」

●家畜伝染病防ぐ

県畜産課の農林水産獣医師は県内5カ所の家畜保健衛生所で、BSEや鳥インフルエンザなど家畜伝染病の早期発見、感染防止を担当し、家畜の健康管理や生産性を高める助言などもする。

●高齢化、不安の声

県職員獣医師は99年度から欠員が常態化している。県人事課によると99年度以降、定員を満了したのは01年度だけ。最近3年間の新卒採用は06年度ゼロ、07、08年度は1人ずつ。職員の高齢化も進む。08年度の県畜産課獣医師62人のうち50代以上が23人、20代は5人。県健康危機管理課獣医師65人のうち50代以上が40人、20代は1人。08～13年度には、ほぼ年に5人ずつ定年退職していく。

中央家畜保健衛生所の検査課長高橋繁一郎さん(53)ら獣医師は、奇形や堕胎を引き起こす家畜伝染病ウイルスを追跡調査する。各家畜保健衛生所が選んだ16頭ずつの子牛から年4回、尾静脈で採血して調べる。伝染病のきざしを把握し、ワクチン接種を呼びかけて流行を未然に防ぐ。

県職員OBの再任用と囑託職員で補充し「業務に支障はない状態」と県畜産課は言うが、囑託職員は労働時間が1日6時間、週30時間以内。県健康危機管理課では「新卒が入らないと後が続かない」と不安の声ももれる。

八代市の松高酪農牧場でも今年4回目の調査があった。

牛の枝肉を点検する獣医師

県食肉衛生検査所提供

